台湾北部紀行（馬祖列島と基隆付近）【後編】

個人会員　福冨　廉

２．基隆付近の海船港

基隆港については、筆者は昔、「船と港」の 113 号（2009 年）に寄稿したし、108 号には池田事務局長のレポート、最近では、昨年の学会誌 24 号に山田廸生氏のレポート等があり、行かれた方も多いとは思うが、今回、色々詳細に見て回ったので、その様子をレポートしてみたい。

（１）港めぐり

馬祖列島の船旅では出入港が夜間のため、特にこの時期では撮影することができない。以前から港巡りがあることはわかっていたが、一度、乗客不足で乗船できなかったことがあり、今回は日曜日ということで期待して行ったが、この季節のせいか、やはり運航されてなかった。代わりに、団体客があったせいか、沖合 5km の基隆島へ行くツアーが実施されるということなので、料金と時間にやや躊躇した（50 分 250 台湾ドル vs 3 時間 700 台湾ドル）が、行ってみることにした。

船は港巡りにも使われる「熱海壱號」。クルーザータイプの大きなモーターボートという感じであり、船室内に入る人も含めて全員にライフジャケット着用が指示される。基隆島まで約 30 分、その半分の時間の港内では、カメラのシャッターを押し続ける状態であった。

基隆港に関して言えば、この港は商港、漁港、軍港を兼ね備えた天然の入り江で、日本が治めていた明治時代に造られ始めたものだが、筆者が APL のコンテナ船の乗客として初めて訪れた 40 年前から、拡張の余地が無いためか、その構成はほとんど変わっていない。台北の港としては淡水河の河口西側にある人工の台北港が作られており、基隆港の補助港ではあるが、規模は大きい。

基隆島は海抜 182m の無人の火山島。2 時間の滞在中に頂上にある基隆島灯台までほとんどの人が登ってくるツアーで、この日は雨模様で今一つであったが、天気が良ければ基隆港付近の眺めが素晴らしいのではないかと思った。

（２）基隆から八斗子

翌日、基隆駅からその南東約 10km 先にある八斗子駅（瑞芳からの深澳線の終着駅、海辺の絶景駅として人気がある）まで、そのほとんどをあちこち寄り道しながら歩いた。

基隆駅の東側には、西岸クルーズターミナル／フェリーターミナル、陽明海洋文化芸術館（後述）があり、目の前に海洋広場、そこから先を左に行くと東岸クルーズターミナル、そして港沿いに色々見て回れる。

東岸クルーズターミナルの奥には巨大な観音様が立つ中正公園があり、港を一望できる。当日は、朝 10 時に「SuperStar Aquaius」が入港するので、まずタクシーで上がった。駅から約 100 台湾ドル（約 400 円）なので、いつもすぐに上がっては徒歩で降りてくる。

その後は、コンテナが積み上げられた小規模のコンテナターミナル沿いに歩いて行くと、小さな造船所が続いた後、正濱漁港にでる。北欧にあるようなカラフルな建物が有名で、その先の橋の袂には史跡になっている阿根野造船廠跡があり、橋を渡って脇に曲がると、その先に台湾国際造船と和平島公園がある。和平島公園の付近からは港口が見えるので、入出港船の撮影にはいい場所である。一方、台湾国際造船の裏門の前がドックで、「麗娜輪」（元、ナッチャン・レラ）が入渠していたが、防塵幕に覆われて外部からはきちんと見ることはできなかった。この「麗娜輪」、時々旅客運航

されているようで、今年だと 2 月に台湾東部の花蓮と蘇澳の間を 2 往復するスケジュールが発表されている。

さて、正濱漁港に戻ると、その先には台湾海洋大学があり、大学キャンパスや救命艇等を備えた訓練施設等がある。さらに進むと、プレジャボートの大きなマリーナと観光市場のある碧砂漁港、イカ釣り漁船などでごった返している八斗子漁港へとつながる。実際にはこの 2 つは港口が 1 つの港で相当に大きな漁港である。ここには昔極洋まで出かけたトロール船「海功（HAI KUNG)」が陸揚げされていた。以前は観光用に公開されていたようだが、今は入れなかった。その先には、国立海洋科技博物館、元の発電所の跡地に建てた船や海洋関係の総合博物館である（後述)。

その他、途中には小さな漁港が点在し、眺めながら歩いて行くと色々興味深い。

中正公園から基隆港港口を望む（右端奥が基隆島）

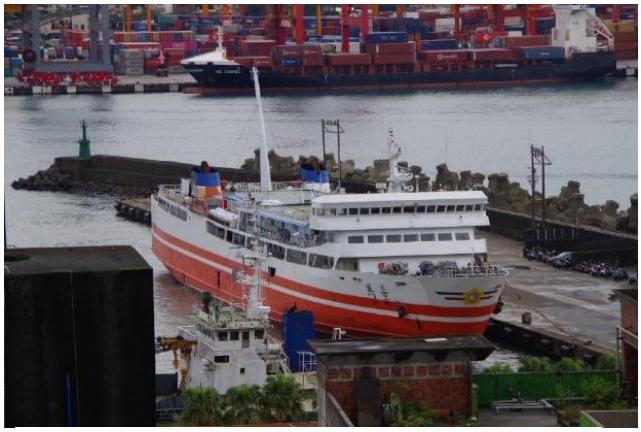
港巡り船「熱海壱號」　　ンテナターミナル（40 年前と変わっていた　　基隆島

入港してくる「SuperStar Aquaius」

中正公園正面、右に「中遠之星」

西岸ｸﾙｰｽﾞﾀｰﾐﾅﾙの「SuperStar Aquaius」

「中遠之星」（元、「さんふらわあ　みと」）
基隆／台中と中国の厦門（アモイ）を結んでいる



「臺馬」（元、九四フェリーの「ニュー九州」）

「合富快輪」（元、隠岐汽船の「フェリーくにが」（初代））

「麗娜輪」（元、ナッチャン・レラ）
台湾国際造船に入渠中

「水試一號　FISHERY RESEARCHER 1」新造漁業調査船

左：阿根野造船廠跡
下左：台湾海洋大学
下右：台湾海洋大学の訓練施設

上左および上右：トロール船「海功（HAI KUNG)」

左：八斗子漁港

３．台湾北部の海事博物館

少し前に、国立海洋科技博物館という海洋および海事に関する博物館があることを知り、今回はぜひとも行きたいと思っていたが、久々なので、これまでに行ったことはある陽明海運、長栄海運の海事博物館も併せて訪れた。入場料はいずれも 200 台湾ドルである。

（１）国立海洋科技博物館

2015 年に発電所の跡地と八斗子漁港地区を再開発してできた比較的大きな観光・教育施設。本館と IMAX シアター、ここの漁港の歴史に関する郷土博物館的な地域探索館の 3 つの建物と旧軍事遺跡やいくつかの漁港からなる公園・散策路、研究施設等が配されている。水族館の建設予定もあるようだが、まだ空き地のままである。台北や基隆からバス、瑞芳から鉄道で行くことができる。

本館は、海洋環境、海洋科学、深海、造船、漁業、海洋文化等のテーマ別に分かれて展示されている。中でも、筆者が注目の造船に関する船舶・海洋工学ギャラリーでは、中央の 8,600TEU 型コンテナ船の 1/10 の模型を中心に現代の船や造船・船舶工学に関する展示が行われていた。特に、東京の船の科学館にもあったような、肥大船型と痩せ型船型の模型を走らせて造波抵抗の違いを説明するものやビルジキールが役立つこと、重心が高いと転覆すること等に関する模型展示が興味深かった。いわゆる歴史に関する展示はここには無い。

本館の外観（ちょっと船風？）

船舶・海洋工学ギャラリー

（２）陽明海洋文化芸術館

基隆駅側の博物館の外観

入場口は左の写真の反対側のこちら

台湾鉄道の基隆駅の左・海側、西岸フェリーおよびクルーズターミナルの手前にあり、陽明海運（YANG MING）が2004年12月にオープンした海事博物館で、建物は戦前の日本郵船基隆出張所として建てられたものである。

3階が常設展で、陽明海運所有船の模型やブリッジのシミュレーター等がある他、基隆港の歴史等が展示されており、2階が特別展示室で、今回はコンテナ（箱）自体やその貨物についての展示が行われていた。規模はそう大きくない。南部の高雄に姉妹館がある。

1949年に蒋介石が地方視察に使った客船「江静倫（KIANG GANG)」の模型

（３）長栄海事博物館

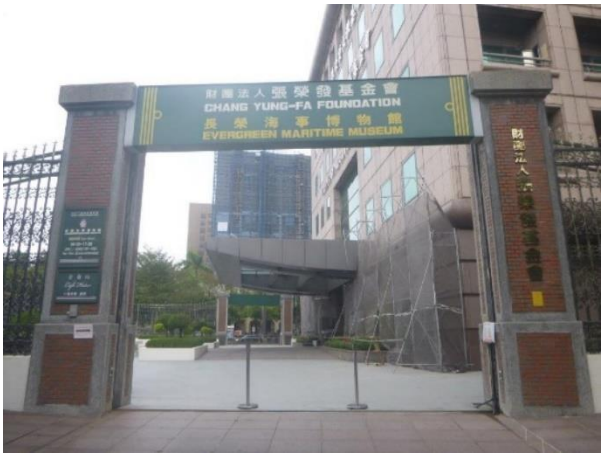
長栄海運（EVERGREEN）が作った海事博物館で、台北駅から地下鉄(MRT)で1駅の台大医院前駅が最寄駅であるが、台北駅からも歩いて20分程で行ける場所にある。観光名所とされる総統府や中正記念堂等も近い中心地に位置している。

1～5階が海事博物館で、展示室は2～5階。5階から入場すると、以下のような構成となっている。

5階：世界の船舶（模型による船舶史）　　4階：現代船舶（客船、商船、軍艦の模型展示）

3階：海洋絵画の展示、台湾の海洋史　　2階：現代船舶の建造、運航に関する展示

スペースは広くゆったりとしていて、絵画の収集等かなり費用をかけたことがうかがわれるが、いわゆる今風の映像展示等はなく、静かな昔風の博物館である。



上左：博物館入口（中正記念堂側）
上右：博物館の建物

左：4階の商船コーナーのEVERGREEN船隊の模型